

あろうか。次に、 $^{14}\text{CO}_2$ 同化葉位と ^{14}C -光合成産物の転流方向との関係についてふれた。

茎頂から数えて3番目と30番目の葉身に $^{14}\text{CO}_2$ を供与した実験の結果を第3図に示した。

第3位葉に $^{14}\text{CO}_2$ を同化させると、沖縄100号の接穂の場合には $^{14}\text{CO}_2$ 供与葉身よりも位置的に下方へ、T-15系統が接穂に用いられると $^{14}\text{CO}_2$ 供与葉身より上方に ^{14}C -光合成産物は転流し易いことが認められた。

次に、第30位葉に同化させた場合についてみると、沖縄100号接穂およびT-15系統接穂の両接木植物において、 $^{14}\text{CO}_2$ 供与葉身より位置的に下方の器官に ^{14}C -光合成産物が多

量に認められた。このようなことから、近縁野生種のT-15系統が接穂に用いられた場合には、上位葉身で同化された ^{14}C -光合成産物は茎頂へ、下位葉身で同化された ^{14}C -光合成産物は地下部器官に転流し易く、栽培品種の沖縄100号が接穂に用いられると、上位葉身および下位葉身で同化された ^{14}C -光合成産物は、地下部器官へ転流し易い特徴を示すことがわかった。

その際、葉身からの総転流量に関しては、両接穂植物ともに、T-15系統の台木の場合に比べ、沖縄100号が台木に用いられるとまさっており、上位葉身および下位葉身ともに総転流量については台木の影響を受け易いものと考えられる。

コロンブスとアフリカのサツマイモ

コロンブスが新世界を発見したのは1492年。そして1992年1月9日発行の『ニューズウィーク日本版』は、「コロンブスの遺産」という特集を組んでいる。

そこに「食の文化大革命」という章があり、新世界原産のトウモロコシやジャガイモ、トマト、カボチャ、トウガラシなどが、いかに旧世界の食文化に大きな影響を与えたかを詳述しているが、不思議なことに、サツマイモのことは、わずかに一行、それが黒人奴隷の食料の一つとなったとあるだけだった。

アフリカから新世界へ運ばれた黒人奴隷の食糧について、まずMary Talbotがこう書いている。

「アフリカにトウモロコシを持ち込んだのは、奴隷船の貯蔵食料として利用したポルトガルの商人だった。

在来種の穀物より育ちが早く、手間もかからないため、アフリカでもアツという間に広まった」「歴史家、ロバート・ホールによれば『西洋人はアフリカで奴隷にトウモロコシ、ヤムイモなど新大陸原産の作物を栽培させ、奴隷船用の食糧にした』のである」。

「ヤムイモ」はヤマイモのことであり、アフリカではもともと食用として栽培されていた。とくにサハラ砂漠の南の年降水量1,250ミリメートル以上の地域に多く、ヤムベルトを形成している。ちなみにトウモロコシはそれより雨量の少ない1,250ミリメートルから250ミリメートルの地域に入っている。

ところがアメリカ人は、どこでどう間違ってしまったのか、サツマイモのことをヤムと呼んでいる。しかも「新大陸原産」のヤムイモとあるからには、サツマイモと解してよからう。それを受けてJohn Schwartzが、こう書いている。

「トウモロコシやサツマイモなどは、コロンブス以後にアフリカに紹介された。やがてこれらの食物は奴隷船に乗って、新世界へUターンする」

欧米人にとってサツマイモは、ジャガイモと違いなじみがない。それをこういう特集上、むりに取り上げるとなると、奴隷の食糧ということになってしまうのであろうか。

(川越いも友の会理事・井上 浩)